

「地域の歴史を学び未来へ伝えるシンポジウム

ー洛北岩倉・大原・松ヶ崎の実践報告を中心としてー 報告

東 昇

2013年3月17日(日)、京都府立総合資料館主催の「地域の歴史を学び未来へ伝えるシンポジウムー洛北岩倉・大原・松ヶ崎の実践報告を中心としてー」が同館講堂にて開催された。当日は午後2時から4時半まで、聴衆は240人を超え、ほぼ満員の状況であった。第1部事例報告、第2部ディスカッションで構成され、会場から数多くの質問もあった。岩倉の中村治、大原の上田寿一両氏の、それぞれの地域に生活し、密着した報告は大変有意義であった。

以下、報告とディスカッションの概要を紹介する。

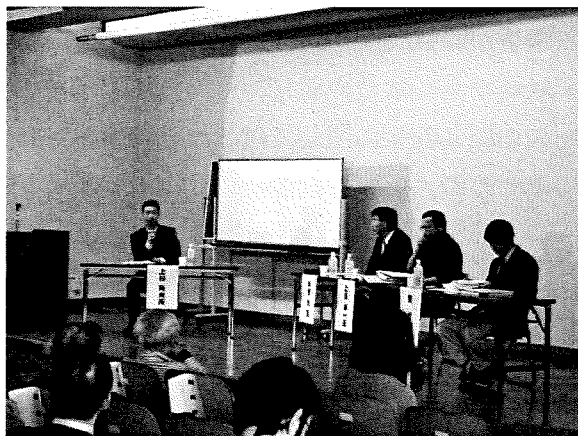
○シンポジウムの内容

第1部 事例報告

- (1) 岩倉 岩倉の歴史と文化を学ぶ会代表 中村 治
- (2) 大原 大原古文書研究会代表 上田 寿一
- (3) 松ヶ崎 京都府立大学文学部准教授 東 昇

第2部 ディスカッション

コーディネーター 京都府立大学文学部准教授 上杉和央
パネラー 第1部の報告者(中村、上田、東)



当日の会場の様子(撮影:京都府立総合資料館)

○各報告とディスカッションの概要

第1部事例報告、中村治氏は「岩倉の特徴—洛北諸地域との比較において—」と題して、写真と聞き取りを中心に、洛北地域は牛乳や野菜、花、薪、里子などを通じて、京都とつながり、その関係のなかで歴史が形成されてきたことを紹介した。上田寿一氏は大原の古文書に記された「今出川橋銭」をきっかけに、関連資料を調べていくなかで、田中村と鯖街道沿いの村との関係、行幸や葵祭とのつながりについて、調査の過程と展開の事例を報告した。

筆者は「松ヶ崎の聞き取りと「探検ウォーク」の企画」と題して報告した。1「「京都の歴史を歩こう！2013 早春の松ヶ崎探検ウォーク」の企画」では、歴史学科文化遺産コースの、現地調査の基本である「あるく、みる、きく、よむ、かんがえる、いかす」を、松ヶ崎の活動から紹介した（なおこの企画について、京都新聞3月13日（水）夕刊の「@キャンパス」紙面に、担当メンバーの庄司・西井・島本による記事が掲載された）。企画に参加した学生が松ヶ崎立正会の所蔵する古文書を解読するなかで、池の魚売買禁止に際して、村と神の間で交わした起請文を見いだしたこと。WEBの最新技術であるAR（拡張現実）を利用して、題目踊りの歴史を紹介する映像を作成したことなどを解説した。

2「聞き取りと明治の調査」では、松ヶ崎の新宮神社について、明治20年（1887）の「町村沿革取調書」と、岩崎皓さんからの聞き取りを比較した。そして両方で記録される内容、一方のみ記録される内容があり、いずれも重要な地域情報であることを述べた。最後に3「京都地域情報・文化遺産データベースをつくる」では、シンポのテーマである地域の歴史を学び、未来へ伝える方法として、今回の企画で実践した地域の歴史を調査、活用する手法、地域情報を集め検索できるデータベースを構築することを提言した。

第2部のディスカッションでは、まず報告者より事例報告を聞いての感想と、会場から多数出された質問に対して各人が答えた。そして大原女の京都への柴販売と交通路の整備、明治初期における愛宕郡の祭礼日統一など、具体的な事例をもとに、洛北地域間の調査や研究協力の必要性が強調された。また蔵の土の中から見つかった古文書から新たな事実が判明するなど、調査、研究のつながりが語られた。それらをふまえ、地域の歴史を学ぶ上で、日常を記録する写真の重要性、昔の記憶が消えていくなかでの聞き取りの緊急性が確認された。

最後に地域の歴史の未来への継承方法については、現在統廃合が進んでいる各地の小学校を拠点にする、研究会の成果を展示できる場所の確保、地域の情報をWEB上で共有化し、若者にもたどり着きやすい環境を作るなどの提案があった。

この他、総合資料館は、会場内に府内郷土史の会報などを展示していた。また「京都雑誌記事索引」について4月からWEB公開を実施との広報もあり、今後、府内の地域史研究のネットワーク作り、データ公開の進展がうかがえた。この活動は、本書で企画した京都地域情報データベースの充実に活かすべき取り組みといえる。

京都地域情報・文化遺産データベースの企画・展開・活用
—明治期の「郡村誌」と近世村町別文書一覧—

編 集 東 昇（京都府立大学文学部歴史学科准教授）

発 行 京都府立大学文学部歴史学科文化情報学研究室

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2013 年 3 月 31 日

印 刷 株式会社 双林印刷社

〒601-8106 京都市南区新千本通十条下ル
